

# 美術科

# 自らの理想を追求し続ける生徒の育成を目指した 学習指導の工夫

～試行錯誤を促す3年間を見通した学びのデザイン～

小 西 悟 士  
吉 田 真 梨

## 1 研究主題について

### (1) 学習指導要領との関わり

令和3年4月より、平成29年に告示された中学校学習指導要領が全面実施された。「中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 美術編」の中で、中学校を卒業したとき「どのような資質・能力」が身につく、「何ができるようになるのか」について、次の通りに示されている。

今回の改訂では、生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わることができる生徒の姿を念頭に置いて育成を目指す資質・能力を具体的に示すようにした。

生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる資質・能力とは、造形的な視点を豊かにもち、生活や社会の中の形や色彩などの造形の要素に着目し、それらによるコミュニケーションを通して、一人一人の生徒が自分との関わりの中で美術や美術文化を捉え、生活や社会と豊かに関わることができるようにするための資質・能力のことである。

単に主題を作品に表すことができるようになることではなく、その過程が重要であり、生徒が表現や鑑賞の活動を通して、自分の生活や社会の中における美術の働きを理解し、自分のよりよい人生を創造していくために生かしていくことができるようになることを目指している。

### (2) 研究主題設定の理由

私たちはよりよい生活や豊かな人生を求めて、様々なものを生み出してきた。創造活動の背景には「もっとこうしたい」や「～だったらいいのにな」といった願いがあり、自らの理想としてよりよいものを求めていく人間の思いは、尽きることはないものである。

美術科の授業においてよりよいものを求めていく姿勢は、より豊かな表現活動や、学ぶ意欲につながるものである。自分の人生を創造していくためには、生徒が理想を追求し続ける姿勢を育むことが重要であると考えた。さらに、そのためには学習指導の在り方についてより一層の工夫が必要になると考え、研究主題を「自らの理想を追求し続ける生徒の育成を目指した学習指導の工夫」とした。

副題については、本校生徒の実態と「挑戦心の育成」の視点から「試行錯誤を促す3年間を見通した学びのデザイン」と設定した。昨年度の研究を経て、授業中の活動の様子や授業のまとめで行う振り返りの記述から、以下のような生徒の変容が見られた。

- ①発想や構想を練る場面において、アイデアスケッチ等で深く思考することに時間を費やすなど、自分の思いを固めてからでない制作に取り組むことができない生徒が多い実態があったが、頭の中で考えたことをまず文字やスケッチで表してみることの大切さや、材料や用具を使ってみて分かることがあることに気付いた生徒が多く見られた。
- ②第1学年において、あまり制限をすることなく様々な材料や用具を使って表現活動に取り組む題材を設定したり、鑑賞の活動の場面において〔共通事項〕を常に意識できるような教師の発問や声掛けなどによる支援を意図的に行ったりすることで、生徒が主体的に試行錯誤したり、考えを他者と共有し深めていこうとする様子が見られ始めた。

このことから、生徒が主体的に表現や鑑賞の活動において、生徒が試行錯誤しながら自らの表現を追求していくためには、3年間の学びを見通した題材設定が非常に重要であるととらえた。また、鑑賞の活動についても、自らが気付いたことや考えたことに自信をもつとともに、造形的な視点で深く見つめ、豊かに美術作品や社会の中にある美術の働きと関わっていこうとする生徒の育成を目指す。

### (3) 学校研究とのかかわり

本校美術科では、挑戦心を「自らの理想（思い描いたこと）に向かって、試行錯誤していく生徒の姿」と捉えている。「試行錯誤する生徒の姿」とは、「何事も失敗を恐れず表現しようとする姿」「既習事項を生かし、それらを組み合わせて新しい表現につなげたり、作品や身の回りにあるものの美しさやよさを感じ取ろうとしたりしていこうとする姿」とした。実際に材料に触れたり用具を試したりしながら自分の表したいことを表現したり、美術作品や社会の中にある美術の働きを捉え、よさや美しさについて深く考えたりしようとするために試行錯誤している生徒の姿が、挑戦心が育成されている場面であると考えた。

昨年度の研究の柱の一つであった個別最適な学びに加え、今年度は協働的な学びの充実について研究を進める。総論に示されている全教科等の授業づくりの三つの手立てについては、研究の実際に示した。

## 2 研究の実際

### (1) 困難に向き合い、試行錯誤するなどの挑戦する学びの場面の設計

表現活動において試行錯誤をする場面を生み出すためには、描画材料の特徴や表し方について生徒が体験を通して理解している必要があると考え、次の題材を設定した。

題 材：A表現（1）ア(ア)

「わたしのためのスクラップ帳をつくろう！」

時 間：8時間

対 象：1年生4学級（144人）

様々な感情や、自然物や人工物などに対する自分の印象などを見つめ感じ取ったことなどを基に主題を生み出し、全体と部分などの関係を考え創造的な構成を工夫し、心豊かに表現する構想を練り、アクリルガッシュの基本的な使い方を身に付けるとともに、様々な表現方法を試しながらその効果を生かし、発想や構想したことをもとに自分の表したいことを工夫して表し、生徒同士の作品を鑑賞し、造形的なよさや美しさを感じ取り、作者の表したい感情や印象、表現の意図と工夫などについて考えるなどして、見方や感じ方を広げる題材である。多様な描画材料に触れて表現方法を試しながら、感情や印象といった目に見えないものを形や色彩、描画材料の表現による特徴を生かして楽しみながら豊かに表現していき、「表現のアイデア」「表現のための参考資料」として、スクラップ帳のようにワークシートにまとめていく。

多くの生徒が初めて使用するアクリルガッシュの基本的な技能を身に付けたうえで、アクリルガッシュの表現だけではなく、これまで使用した色鉛筆やクレヨン、マーカーペンといった描画材料も使用して、描画材料等の特徴や表現から生まれるイメージなどについて体験的に学び、知識として身に付け、今後自分の表したい思いや目的などに合わせて吟味していくことができるようにしていくことをねらった。多様な描画材料に触れて表現方法を試しながら、感情や印象をといた目に見えないものを形や色彩、描画材料の表現による特徴を生かして楽しみながら豊かに表現していく経験をさせていくことをねらった。

以下、生徒の活動の様子である。

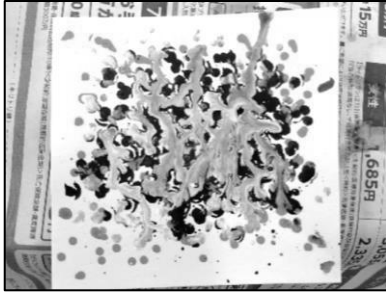
#### ①アクリルガッシュの基本的な技能について（資料1）

生徒に「絵具の工夫としてどのようなことが考えられるか」とまず発問をした。生徒は「絵の具をとく水の量を変えること」「色をつくること」「筆の動かし方を変えること」などがあがった。工夫に関わる共通の視点のみを与え、自由に試してみるように促すとともに、班の中で互いの活動を共有し合いながら進めるように促した。

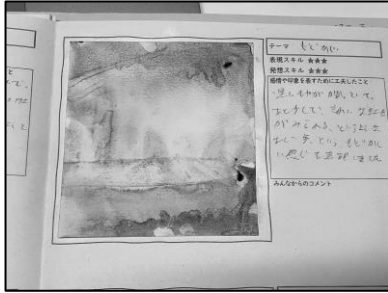
#### 資料1 アクリルガッシュの基本的な技能について生徒の活動の様子



## 資料2 生徒の表現の活動の様子



## 資料3 生徒の鑑賞の活動の様子



### ②多数の描画材料を試しながら、感情表現の方法を追求する表現の活動（資料2）

アクリルガッシュ、色鉛筆、水彩色鉛筆、複数種類の水性マーカーを用意した。生徒には、「目に見えないものを表してみよう！」と提案し、描画材料を工夫して、感情や印象といったいくつかのテーマから自分が表したい感情や印象を基に、様々な描画材料を使って画用紙に表すように伝えた。示されたテーマを基に、描画材料の特徴を生かして平面に表現した。また、学級ごとに生徒に考えさせ、テーマの難易度を三段階で設定させた。難易度を生徒に設定させたのは、「挑戦心」に関することである。難易度を設けることで、苦手意識を持っている生徒が取り組みやすくなるようにすることや、好きだと感じている生徒や意欲的な生徒に対して、より難しい表現に挑戦している感覚を味わわせ、表現することや挑戦することの楽しさを味わわせることをねらった。

### ③互いの学びを他者と共有する鑑賞の活動（資料3）

自分が制作したものをワークシートに整理し、自分の作品を鑑賞する時間と、ワークシートにまとめたものを他者と鑑賞しあう時間を設定した。自分が表したものをじっくりと見つめ、その特徴や表したテーマを基に並び替えたり分類したりして、ワークシートに貼り付けるようにした。どの描画材料のどのような表現や配色によって、どのような感情を表すことができるのかをじっくりと見つめ直し、表した感情や描画材料の工夫をワークシートに記述するように伝えた。ワークシートは画用紙の台紙に貼りつけ、スクラップ帳のようにまとめ、保管できるようにした。まとめたものを互いに鑑賞し、表現のおもしろさや描画材料の工夫を味わう時間にした。

## (2) 生徒自らの挑戦心の意識化

### ① 学びを振り返る活動の場面

本校では、3年生で「卒業制作」の授業を実践している。この「卒業制作」を通して、生徒は、将来の夢や理想の自分について探求する。その中で、平面や立体、映像など、それぞれの表し方や活動場所を広げていくため、教師は、活動の見取りや個別の指導が難しいと感じていた。そこで、毎時間の記録をデジタルで行いオンライン上で共有している（資料4）。

タブレット端末で制作の様子を記録し、その成果をビジュアルとともに蓄積していく。内容は、撮影した写真や映像を貼り付け、①今日の制作・やったこと、②制作で発見したこと・気付いたこと、③次回の挑戦・目標、④その他（メモ、質問等）となっている。振り返りを読むと、生徒一人一人が制作を通して造形的な視点に気付いている記述が見られる。制作中に考えたことや取り組んだことを言語化することで、考えを整理し、次回の目標を設定す

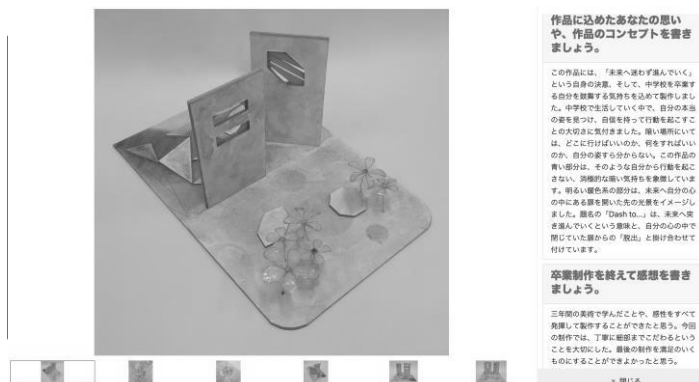
るなど、自己と対話しながら学びを深めていく。教師は、その過程や変容をデジタルで見取ることで、生徒の挑戦心を後押しするような適切なフィードバックが可能になる。

毎時間の振り返りは、授業記録共有型アプリケーションを活用し、オンライン上で提出される（資料5）。そうすることで活動の様子やその中で発見し学んだこと、生徒の変容等をいつでも見取ることが可能になる。

資料4



資料5



#### 4 研究の成果と課題

成果について、次のような生徒の姿や記述が見られた。

- 多くの材料を試す機会をつくったことで、生徒が経験的に描画材料の特徴や表現について学ぶことができた。また、生徒が使用する描画材料や思いつく表現方法の幅が広がっており、一人ひとりの作品や表現がより個性的になってきた。
- 授業の振り返りの記述から、「まずはやってみることが大切だ」「試してみないとわからないので～」など、表したいことを表現していくためには試行錯誤することが大切であるということに気付いている様子を読み取ることができた。
- 作品発表会では、自らの理想のイメージを材料など工夫し、形や色彩から生まれるイメージと結びつけていく様子が語られ、実感を伴って知識の定着が図られる様子が見られた。また、作品の見栄えを意識せず、自分なりの表し方に自信をもつようになった。

課題については、今回の題材では描画材料にとどまってしまった。また、半立体の表現も後々出てきたものの、立体に表すことや描画材料以外の経験をさせることができなかった。年間指導計画の見直しや題材の工夫を考えていく必要がある。また、毎時間の振り返りに時間を費やすため、制作する時間が短くなる点が課題である。制作の準備や片付け、振り返りの時間を除くと、制作時間はわずかである。生徒が材料に触れたり、用具を試したりしながら自らの表現を広げ深めるには時間が短いと感じる。今後は、振り返りの回数や内容を精査していく必要がある。

<参考文献> 『中学校学習指導要領（平成29年告知）解説 美術編』（2018.7）文部科学省